

フィクションの分析可能性

——テキスト資料と概念分析の社会学——

東京大学大学院・日本学術振興会 岡沢亮

1 目的

「概念分析の社会学」とは、エスノメソドロジー研究を特徴づけ定式化するための一つの表現である（西阪 2001, 酒井ほか編 2009）。エスノメソドロジー研究は、会話の録音や録画データだけでなく、新聞や雑誌記事、論文、判決文、さらには地図や詩など、日常でよく目にするテキストから歴史的あるいは専門的なテキストまで様々なテキストを分析してきた。

本報告は、概念分析の社会学の立場からのテキスト資料の分析方針、すなわちテキストの理解可能性を支える概念の論理文法を解明するという方針を、改めて明確にすることを目指す。

2 方法

以上のような概念分析の社会学の分析方針を示すために、これまでそれほど分析されてこなかった種類のテキスト、特にフィクションのテキストを分析する。このような分析対象の選択は、概念分析の社会学の一貫した方針と分析対象の幅広さを示すために役立つと考えられるからである。私たちはフィクションを読む際に、誰がどこで何をしているのか、いかなる感情を抱いているのかをだいたい理解できる。さらにそれだけでなく、ある語り手が「信頼できない語り手」であることや、ある表現が「メタフィクション」であることも理解できる。こうした理解可能性がいかにして成立しているのかを具体的なテキスト資料の分析に基づいて示す。

3 結果

あるフィクションのテキストにおいて語り手が「信頼できない語り手」であることや、ある表現が「メタフィクション」であることを理解するためには、必ずしも映画や文学などに関する高度な専門的知識が必要とされるわけではない。そうではなく、出来事の記述の方法に関する常識的な知識や、フィクションに関する規範的な概念連関に基づくことによって、私たちはそれらのフィクションのテキストについて理解することが可能になっているのである。

4 結論

テキストの社会的分析にとって重要な問題のひとつは、テキストの理解の恣意性や多様性がいかに向き合うかというものだろう。概念分析の社会学は、テキストの理解可能性を支える概念の論理文法を特定することで、こうした恣意性や多様性について一般的かつ抽象的に主張するのではなく、具体的なテキストの理解についてどのような多様性や恣意性があるのか、またそれらの異なる（ときには恣意的な）理解がそれぞれいかなる前提に基づいているのかを明らかにすることができる。この点において、概念分析の社会学は、テキストの社会的分析を行うにあたって有益な視座を与えてくれると考えられる。

文献

西阪仰, 2001, 『心と行為——エスノメソドロジーの視点』岩波書店。

酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編, 2009, 『概念分析の社会学——社会的経験と人間の科学』ナカニシヤ出版。